

第2回 六条円卓会議 開催報告②

宗教と平和

～自他共に心豊かに生きることのできる社会の実現にむけて～

開催日 2015(平成27)年2月10日

◆「戦争と宗教」(中篇)——伊勢崎賢治先生インタビューから——

【宗報】(六月号)に続き、伊勢崎賢治先生(東京外国語大学教授)への取材について報告します。現在、取材内容を、「前篇」「中篇」「後篇」の三つに分けて報告しています。今回は、その「中篇」

で、テーマは「紛争と宗教との関係」です。戦場において武装解除に従事されたご経験をお持ちの伊勢崎先生が、紛争の現場において感じられていることをお話しくださいています。

紛争終結のきっかけ作りにおける宗教者の役割

Q——私たち宗教者としても、イスラムという宗教と今回のような紛争との関係に強い関心があります。これまで紛争の根っこには「構造的な暴力」があり、単純でなく、終わりを見極められないというところを、先生からお聞きしてきました。その構造的な暴力がある状況において、宗教と紛争が非常に不幸な方たちで結びついてしまっているように感じられます。むしろ、宗教が平和を構築する役

割を担えればと期待するのですが、現実には、その逆になっているように思います。現場の視点から見て、宗教と紛争について、どういうご意見をお持ちでしょうか。

伊勢崎 内戦が起こったスリランカは仏教徒の国で、とても信仰が篤いですが、私は以前、アフリカにも行きましたが、人びとは信心深いですね。アフリカの場合、キリスト教も、イスラム教も多いですが、旧宗主国の影響か、キリスト教が多いですね。そして内戦を主導している連中も、

ISISの発生経路を見ると、アルカイダとも袂を分かつような先鋭化した人たちですから、宗教的なチャンネルを使うのも、今はちょっと難しいかもしれませんがね。これから時間が経てば、そのチャンスは巡ってくるかもしれません。

宗教による恐怖政治

Q——信仰が共通し、かつ信頼される宗教者が紛争において大切な役割を果たし得る。特に、停戦の最初のきっかけを作る時に、重要な役割があるということですね。ところで、今回のISISの問題でも、彼らがイスラムという宗教を前面に出している印象がありますが、ISISの内部において信仰がどのような意味を持つていると推測されますか？

伊勢崎 ISISのリーダーは、彼らが解釈する信仰を恐怖政治に使っていると思いますね。テリトリーを確立するには、住民を支配しなければいけないわけです。それには、二つのやり方があります。

一つは開発を行うなど恩恵を与えたりすること。つまり、ちゃんとした行政を行うわけです。もう一つは、戒律を厳しく敷いて支配する。ISISは、この両方を使っています。アフガニスタンもそういう状態だったわけです。タリバンも同じような方法によって、一時は政権を取るまでになったわけです。彼らがやりたい統治を、信仰を通して神聖化し、それに反対するものを不浄なものとして厳しく処断する。こうして急速に統治を拡大していったわけです。その信仰が「共産主義」であつても、ゲリラのやることは同じ。こういう人たちを総称してインサージェント(反乱者)と言いますが、人間がやることは、基本的に、皆同じなのです。

軍事的活動と人道的支援の葛藤

Q——宗教の歴史を概観すると、日本でも戦うための心の準備に協力してきたこと、宗教が支配の道具となった歴史があったことが分かります。宗教は人びとの

一応信心深いわけですから、まず停戦合意のための最初のテーブルに着かせるための、本場に最初のきっかけを作らなければならぬ時に、それを宗教者にお願するということケースは結構あります。和平に向けての政治交渉は、その筋の外交専門家に委ねるとして、宗教者は敵対勢力双方にとって黙っていても敬意を払われる存在ですから、最初のきっかけを作るのは、宗教者に向いています。ISISの場合はどうかということ、彼らと同じイスラム教スンニ派の世界的に尊敬されているような宗教学者もしくは指導者が、マレーシアなど、我々と思えば疎通ができる国々にいます。アフガニスタンのタリバンなんかは、そういう宗教者を通じて、我々の世界と対話が可能です。そんなに簡単なことではありませんがね。

しかし、対話できる敵と、対話できない敵がいるわけです。宗教者を通じてという方法でも、対話の可能性が見いだせない相手がいる。

心に影響を与えますから、信仰の持つ危うさは、ある程度実感できます。現代日本に居る人は、何であんなことになったのだろうと思いがちですが、歴史を振り返って、私たちの国でも同じことがあったと知らなくてはならないと思います。このように信仰がからんで支配されている場合には、どのような方策を取って、紛争状況を解消すべきでしょうか？

伊勢崎 たぶん、軍事的なものや人道的なもの、両方をやらなければいけないでしょう。まず、彼らの支配のテリトリーが広がらないように、二次被害を生みやすい空爆を最小限に抑えながらイラク軍やその他の準正規軍を中心に軍事的に制圧するということ。それと、住民の帰依を何とか、こちら側に勝ち取る。支配地域を解放した正規／準正規軍が、住民を同じように支配したら何の意味もありません。解放後の統治を人道的なものにする。そこに国際社会の目を入れる。そして、インフラ復興、人道援助、できるだ

うと、元からいた役人や教員や医療関係者を使う以外ないわけです。それにはお金がある。結局はお金です。今回のISILの場合も全く同じですが、おそらく、アフガニスタンのタリバンの時よりも、恐怖政治に頼らなければならない部分が多いのではないかと思います。

一番頭のいい占領統治のやり方は、そのまま政府機構を乗っ取って支配するという方法です。それが一番効率的です。タリバンなんて、まったくそんな経験がなくても政権を樹立したわけですから、ISILにもできないことはない。しかし、長くは続きませんね。

今は原油があるところを狙って、そこで得た原油を売って稼いでいると言われています。それから、今回のように身代金を狙ったりしていますが、ほとんど国際社会も包囲網をかけていますから、経済的に困窮するはずですよ。そうすると、住民の帰依が続かなくなります。住民が不満を持つようになり、言うことを聞かなくなります。そうすると、彼らは、も

けの国際支援を入れることは重要です。その見極めは厳しいです。何をやっても、住民の被害は出ます。本来は、その地域に恐怖政治が入り込む隙がないように、その国家が提供する統治がしっかりしていれば一番いいのです。恐怖政治が入り込むということは、その国家の統治に根強い不満、宗教や民族の差異による差別感とかが鬱積しているということですから。特に、このISILの場合は、宗教ですね。もともと、イラクでサダム政権を倒した後、シーア派に肩入れすぎで、民族対立を激化させたアメリカの占領統治が一番の叱責を負うべきなんです。このようなことを二度と繰り返してはいけません。

ISILによる統治の今後について

Q——報道で見る限り、ISILには統治もしっかりやろうという動きも見られますね。このような統治は、支配地域に根づいていくことが可能でしょうか？

つと恐怖政治をやりますね。だから、住民が一番苦しむわけです。結局、当時のタリバンやISILのような恐怖による統治が、なぜ、その地に蔓延るかという点、もともとちゃんとした統治がされていない、中央政権に対する潜在的な被害者意識が、恐怖政治の大義を受け入れやすい土壌をもたらしているのです。そういう土壌を生む「構造」をつくったのは誰か。何か。遠く離れた日本で、全く無意識にこういう土地から生まれる資源を享受し日常生活を送る私たちに無関係なのか。これをしっかり見据えないと、ISILは倒せても、このような集団を生む「構造」は無限に続くのです。

※今回は、宗教と紛争の問題を中心に
お聞きしました。次回は、取材の
「後篇」です。後篇では、日本を取り
巻く状況、そして日本の危機の本
質についてです。

伊勢崎 誤解を呼ぶかもしれませんが、ISILがしていることは、ある意味、占領統治なのです。米軍が日本にしたのと同じように。圧倒的なよそ者の武力装置が入ってきて、統治を確立しようとしているわけですから。日本は、うまくいったのでしょ。誰も文句を言っていないから。戦後の日本には、日本政府があつたからです。日本をきちんと統治するための役人もいたし、地域を安定させることに必要な人材がいました。彼らが、「占領者」のために働いた。

タリバン政権がアフガニスタンで樹立された時も同じような構造でした。タリバンという、小さなロビンフッド、義賊みたいな連中が、「世直し」のために立ち上がり、どんどん大きくなっていったわけですが、そのバックにはパキスタンからの資金・軍事援助がありました。その支援と「教義」によって急速に統治を広げていったのです。

行政経験がないタリバン政権がどうやって民衆の人心を掌握していったかとい

*1 構造的暴力とは、暴力の主体が明確でなく、社会構造・政治構造として障害や排除といった暴力がはたらいている状況のこと。戦争や政府の軍事的抑圧という直接的な暴力に対して、不平等、貧困、格差などの状態のこと。ノルウェーの社会学者・平和研究者であるヨハン・ガルトゥングによって提示された。ガルトゥングは、構造的暴力の克服が、平和研究の重要な課題であるとし、「人間の安全保障」の概念には、このガルトゥングの考え方が継承されている。

*2 イラクとシリアで発生したイスラム過激派組織で、ISや、ISIS、L、ダーク・シエ、イスラム国」と呼ばれることもある。なおISISは、Islamic State of Iraq and Syria (イラクとシリアのイスラム国)の略称を由来としている。イラクとシリアの国境地域を中心として、武力支配し、「カリフ国家」の建設を主張している。カリフとは、イスラム国家の最高指導者の称号であり、代々世襲されていったが、これに反発して分派したのがシーア派であり、逆にカリフの権威を承認しているのがスンナ派である。